

米の収穫量は45万7,100トン

昭和41年産水陸稲 かんしよ

収穫量調査結果

1 収穫量

作物名	作付面積 ha	10a当り収量 kg	収穫量 t	前年対比 t	作況指数 %	
水稲	早期栽培	31,500	382	120,300	+40,900	96
	普通栽培	74,000	368	272,200	-39,500	93
	計	105,500	372	392,500	+1,400	94
陸稲	32,000	203	64,600	-3,900	98	
水陸稲計	137,500	—	457,100	-2,500	—	
かんしよ	13,700	2,430	332,900	+1,400	97	

2 作柄概要

(1) 水稲

田植後の低温と台風4号の来襲により初期生育を停滞させたが、6月下旬以降の気温上昇と多照により、有効穂数は平年に比べ106~107%となり、さらに8月に入り単位面積当り全粒数は平年対比104%を確保、作柄はさらに好転した。しかし8月下旬~9月上旬に利根川沿岸霞ヶ浦湖岸、波崎町を基点として、東海村に至る海岸線に昭和17年発生後例を見ないうんかの大発生を見、早期栽培の豊年早生、コシヒカリ（登熟中、後期）および早期栽培のうち熟期の早いコシヒカリ、クサヅエ（登熟前期）が集中的な被害を受けるに至った。9月中旬以降はこの被害が県西、県南中央部にまでおよび大巾な収量低下となった。

ア 早期栽培

8月下旬~9月上旬にかけて登熟後期~成熟期にあった豊年早生を含む一部の早生品種については、うんかの被害を大きく受けることなく収納されたが、豊年早生のうち、やや熟期の遅れたものと、コシヒカリは最も大きな影響を受け、屑米重の増加は過去における最高（181%）を示し、玄米重歩合は勿論、粗玄米干粒重、玄米干粒重とも過去5か年中最低となり作柄低下を余儀なくされた。

イ 普通栽培

早期栽培同様近年早殖化により作付の増加したコシヒカリ、クサヅエなど熟期の早いものについてはとくに大きな被害を受け、いもち病の発生なども加わり、早期同様屑米重は平年対比173%と過去の最高を示しさらに玄米重歩合は最低となるなど、早期栽培よりもさらに作柄は低下した。

(2) 陸稲

初期生育の低温、寡照、7月下旬~8月上旬における干害のため、生育は遅延したが、その後の気象好転により作柄は相当に回復した。しかしこの干害と9月中旬の

低温の影響が加わり作柄は悪化した。このためとくに北部地域の作柄は最も悪く、これらの影響を受けなかつた鹿行、南部地域においては作柄は非常に良い結果となった。

(3) かんしよ

低温のため初期生育は不良で、収量低下が懸念されたが、適当な雨量と日照に恵まれたため、9月1日以降の肥大率は過去年次最高を示し（223%）とくに加工用いも（沖繩100号玉豊）の肥大率は最も高く、作付面積の減少（対前年比9.1%）にもかかわらず、ほぼ前年並の収穫量となった。

3 被害概要

- 水稲は平年のほぼ2倍の被害発生を見たが、この増加は8月下旬以降に異常発生したうんかが主体である。
- 陸稲については干害、いもち病、雹害を除きともに平年より被害は少ない。
- かんしよについても、風水害、干害、温害、雹害などが相続き、虫害はいもこがむし、なかしろしたばなどともに平年を上回る被害の発生を見た。

4 検査数量の前年比較

12月10日現在

区分	等級						
	1	2	3	4	5	外上	規外
本年(%)	0	12	49	34	5	0	0
前年(%)	0	11	46	35	8	0	0

等級比較は昨年よりやや良いが、前年は冷害、風水害干害、雹害さらに、いもち病と被害が重複したことが品質を低下させた要因であり本年はうんかの被害が登熟期に集中したため、干粒重は低下したが、整粒歩合が良いことが特徴である。

（農林省茨城統計調査事務所）